町史とっておきの話 205

只見瞽女夜話

洋画家 渡部等

八月号からは只見に訪れた瞽女の話です。執筆は、只見町小川在住の洋画家・渡部等さんです。渡部さんは、画業のかたわら、子どものころに出会った瞽女に惹かれ、その軌跡を追い続けておられます。瞽女の生きざま、只見での活動など、これまでの調査成果を六回にわたって綴っていただきます。

瞽女との出会い

三味線を持ち、重い荷物を背負って三人、四人と一列に並んで歩いて行く女性たち。いろいろな村を訪れて門付けするため、彼女たちは旅を続けます。……瞽女と呼ばれた人たちです。越後では昔から彼女たちのことを「ごぜさ」と呼んできました。瞽女さまや瞽女さんがなまってそう呼ぶようです。只見地方では、「ごぜんぼ」と言いますが、長岡市の瞽女研究家・鈴木昭英氏によると、その名前はどちらかと言うと蔑称だそうです。

かつて彼女たちは越後内に限らず東日本一円に芸を披露しながら歩き回っていました。秋田、仙台～いわき、長野、群馬～東京、横浜、富山、福井とその活動範囲は気の遠くなるほどです。当然、隣接している会津地方、そして只見地方にも頻繁に来ていました。

平成十七年に一〇五歳で亡くなった小林ハルさんが最後の瞽女として新聞に大きく取り上げられていたのを記憶していますが、この人の口伝をまとめたものを読むと、只見地方にも八十里越を越えてやってきていることがわかります。叶津・八木沢・田子倉・楢戸などの地名も出てきます。瞽女宿もあったようですが、今から百年ほど前の小林ハルさんが初めて来たころは、親方に言いつけられて泊めてくれる家を方々探し歩いたようです。只見地方でも二代か三代前の人たちは、この瞽女唄や瞽女三味線の音を聞いてきたのです。

わたしが瞽女というものを初めて意識して見たのは、小学校低学年のころです。雁木の石畳道で友人とメンコに興じていると、向かいの家並みの玄関先で三人並んで三味線をかき鳴らし唄い始めたのを覚えています。子ども心にも不思議な光景でした。この三人こそ、最後の高田瞽女、杉本キクイ・杉本シズ・難波コトミの三氏だったのです。当時、国の重要無形文化財、いわゆる人間国宝には指定されていませんでしたが、昭和四十五年には指定されていますので、瞽女というものに最初で最後のスポットライトが当てられ出した時期だと思われます。

その頃、映画「吉原炎上」の原作者で画家の斎藤真一氏が足繁く杉本さん宅を訪れては絵にすべくさかんに取材していたといいます。ちなみに彼はこの高田瞽女シリーズを描いて一躍有名画家の仲間入りを果たしていますが、このことは無情にもわたしを瞽女を描くことから突き放してしまいました。ともかく、昭和四十年前半のことではありますが、瞽女という存在を見て記憶している人間としては、おそらくわたしが最後の世代だと思います。

消えた文化・瞽女……蔑まれ、差別されたりしながら社会の最下級の人生を余儀なくされつつも、なおかつ、健気にたくましく、ときにはしたたかに、またある面では誇り高く生き抜いた彼女たちの痕跡をたどることは、混迷するこの時代、とくに三月十一日の東日本大震災を経験したわれわれにとって少なからざるヒントやメッセージを投げかけられるものと思われます。この連載の何回かをお借りして、瞽女を知る町の人の話やエピソードも織り込みながら筆を進めていきたいと思います。

盲目の旅芸人・瞽女（渡部等・絵）